

『人間と戦争』

——学徒兵の思想史——

莊子邦雄著 朝日新聞出版
2013年、2500円＋税

高橋 武智

重い本だ。300ページをこえる分量だけではない。副題「学徒兵の思想史」が示すとおり、今年70周年を迎える「学徒出陣」組の戦後の歩みを検証しようという労作だ。

1952年から始めた記事切り抜きをもとに、膨大な読書・調査研究・思考を重ねた末、無数の引用文と、精密な注釈とが何ページもつづく。それでも著者の構想は半分も達せられなかったという。著者の本業は、労働刑法を専門とする法学者。北海道大学教授・札幌学院大学学長などを勤めた。

本書の根柢をつらぬく思想的立場は明確だ。日露戦争開戦直後にトルストイが書いた『反戦の訴えー悔い改めよ』と、幸徳秋水・堺利彦によるその共訳に感動して与謝野晶子が詠んだ詩、「君死にたまふことなかれ」（「君」とは旅順包囲軍の一員だった弟のこと）、「旅順の城はほろぶとも ほろびずとも何事ぞ」と言い切る）とに見られる不戦平和の信念である。第一章「原爆投下の「残虐」と戦勝国の「正義」では、ヒロシマ・ナガサキが明白な非人道的犯罪だった上に、その報道が強権によりいかに抑圧されたかを示す。とりわけ、最高司令官マッカーサーの傲岸で越権的な軍事裁判指揮が論難される（そのあまり、山下奉文・本間雅晴などが立派な軍人であったかのような印象を受けた。敗戦時10歳だった筆者には、その逆

の証明がないかぎり、当時の司令官を正義の人とは考えにくい。せめて、戦後ドイツにおけるように、日本人が日本人の戦争責任を裁くという視点が提示されてほしかった。さらに歴史的に、アメリカ白人は、独善的な「天命思想」から、原住アメリカ人、日本人さらにはベトナム人への虐殺をおこなってきたことが後づけられる。

第二章「戦争の悲哀とその虚実」は、みずからの体験と重なるだけに、著者が最も力をこめた部分だ。沖縄地上戦、特攻作戦、守備隊全滅などの真実をあばき、それをめぐる軍指導部の無責任を強く告発する。沖縄では、軍から住民自決の命令があったかどうかを改めて問われ、「軍民一体共生共死」という当時のかけ声こそが住民を死に追いこんだことが証明される。

東ニユーギニアでは、死んだオーストラリア兵士の肉だけでなく、死んだ戦友の肉を食べたという短歌が引用される。

倒れたる戦友の太ももの肉食せし吾

これがまことの戦かと知る

すでに奥崎謙三の『ゆきゆきて 神軍』中に人肉食への言及があったが、「人肉食禁止令」という師団命令が出ていたことを本書ではじめて知った。

学徒兵についての記述はとりわけ詳細をきわめる。戦没学生の手記に遺稿が掲載されている人々の何人かは著者直接の学友だった。学友ではないが、『はるかなる山河』には、特攻兵器「回天」での出撃を前に母親に宛てた多角泰彦の最後の手紙が載っている。ところが、多角は親しかった学友に宛て、「鬼となつても生きたい」という本心を便箋3枚に書き綴っていた。なぜかこれを受けとった友人がこのもう一通の遺書の存在を明らかにしたのは、50年も

たってからのことだった。

「特攻志願」をめぐる、著者は次のように書いている。

……「そうせざるを得ない時代だった」ということばは、……「学徒出陣」した私からみても、真実味のあることばとして心に響く……。…（特攻以外にも）「途があったはずだ」というような戦後からの超越的な批判に対しては、「学徒兵として『強制機構』の軍隊に身を置いた人間として、激しい怒りを覚える。……」

——この部分には保留を覚えた。トルストイや晶子の主張はどこへ行つてしまったのか？ 体験や実感に寄り添うのでなく、わが身に帰ってくる考え方を展開してほしかった。戦争がつづく今こそ、戦争体験を改めて伝承し継承しなければならぬわけだが、この営みは体験を歴史化し、思想化するためにこそ必要なのではないだろうか？ それとも個人は時代を超えられないという宿命論にたつのか？

本書のなかに2カ所、前線で対峙する両軍兵士のあいだに「交歓」のひとときがあった事実が紹介されている。第一次大戦下、塹壕で向き合うドイツ兵とフランス兵のあいだの交流は、第一次大戦期の『ドイツ戦没学生の手紙』に記されていた。もう一つは1985年6月8日付「朝日」が写真入りで報道した記事で、見出しには「激戦下の沖縄で日米兵士が会食」とある。阿嘉島での出来事だ。

2例とも、軍隊という「強制機構」のもとにありながら、何がこのような希有の機会を出現させたのだろうか？ このことの考察こそ、戦争の克服へ近づく一歩ではないだろうか？

（たかはし・たけとも／本誌編集委員）

